薄桜鬼　～鬼姫と呼ばれる鬼～

?ユッキーは魔王様?

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
薄桜鬼　～鬼姫と呼ばれる鬼～

【Ｎコード】
Ｎ０４７４Ｚ

【作者名】
？ユッキーは魔王様？

【あらすじ】
届かない声　わからない自分の存在理由　でも確かに生きている記憶がない少女が今ここに！！

主人公設定（前書き）

薄桜鬼で新連載

やっちまったよ！！

主人公設定

主人公設定
名前　紅月（こうづき）　夜宵（やよい）

年齢　１８

身長　１６１．２

体重　「言わないよ」

容姿　整った顔立ちで可愛い瞳が深紅色で髪色が銀色みたいな白髪

性格　強そうに見せるタイプだが実は・・・・・

好きな色　灰色　水色

詳細　親に捨てられたと勘違いしており、現代で生きてきたが突然トリップし幕末へと行く
記憶が無い

親の名前

香苗

詳細　夜宵の母親で現代に送った本人

隆哉

詳細　記憶を消した本人夜宵の父親

両名ともに亡くなっています！！

ヒロイン書いてほしいです

主人公設定（後書き）

とりあえず終わり

第０夜～プロローグ～（前書き）

現代です！！

第0夜～プロローグ～

「ハァハァ・・・・ハァ・・・ハァ

またこの夢」

私には記憶がない

なのに何故？

古く大きい建物と言うより城と言った方がいい建造物

だがそれは
古く
現代にはあまり見かけない建物

その奥には私が居てふすまから見える外の風景を眺めてる

その風景も現代とはかけ離れている

まさにその時代は

江戸や幕末といった方がいい景色

そこにはもう1人女の人がいる

その女の人に向かって

『お母様』と呼んでいる

そこから場面が変わって

私のまわりは

赤

紅　　赤

紅

アカ

アカ

赤ばっか

炎の赤

そして

血の紅

それともう１つ

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・私と同じ髪

色と瞳の色の人についてるアカ

それから

黒い闇が広がる

いつもそこで途切れ起きる夢

でも

リアル過ぎて

怖い

黒い

真っ黒い闇に取り込まれそうで怖い

怖い恐いコワイ怖い恐いコワイ怖い恐いコワイ恐い恐い恐い

「夜宵〜ご飯〜〜」

『っ！！！ハーイ今いく』

今の声は私の義母さん

あの雨交じりの雪が降っている日私は義母さんに拾われた

いつも通りの学校

でもその日は

いつもと違っていた

「紅月さん？」

『そうですけど』

私が１人帰っていると声をかけられた

振り返ると

キレイな女の人

「これを夜宵様に」

そういって差し出されたものは

『刀？』

そもそも様？っておかしい

「その刀はあなたが本来持つべき刀

ーーーーーー月光華（げっこうか）」

『月光華（げっこうか）？』

「あの子たちを助けてください

我等の姫であり宝の鬼姫様」

『えっ何言って??』

私が目にしたのはきれいな

狂い咲きの

桜

突然上がる突風

振り返るとさっきの女の人はいなくなっていた

桜の花びらが1枚1枚散っていく

すると何故か眠くなっていった

そして私の意識は

闇に落ちてった・・・

第0夜～プロローグ～（後書き）

どうでしたでしょうか？

感想欲しいです！！！！！！！

第1夜～出会い～

「・・・つぅ・！！ここは？」

まだ朦朧とする意識・・・・

そして

手元には・・・・・

さっきの人が持っていた・・・

「キャァァァァァアアアアアァ」

「ッ！！」

『月光華（ゲッコウカ）』という刀

突然聞こえた悲鳴・・・

行かなきゃ

と

そう思った・・・

私は走った

そして見たものは

あの夢と

私と同じ瞳と髪色の

化け物

その奥には

男の服装をした

女の子

助けよう

そう思い私は

刀に手をかけた

「大丈夫？」

「えっ・・・・・・・あぁ　ハイ！！！！」

「そうなら少しじっとしててね」

「えっでも」

「いいから」

そして私は

『月光華』を振るった

ザシュ

終わった

そう思った

だけど・・・・・・

「ッ！！！」

こいつも私と同じ

なのに

こいつと私との違い

それは

血に狂ってる

か

狂ってないか

このままじゃこちらがやられる

だから！！

心臓を

斬る！！

血渋きが舞う

それを浴びる私は

残酷な生き物

突然私は人の気配を感じた

「誰？」

「あぁ〜〜バレちゃった」

「総司ふざけてないで」

「はぁ分かってるよ

一君は五月蠅いなぁ〜」

「何する気？」

私は聞いた

「何って??斬るんだよ」

キンッ

「なぜ切られなきゃいけない?」

「『アレ』みたでしょ?」

「だからなんだ?」

「フ〜ン気が強いね」

「はぁ」

私はボソッとメンドとため息交じりに吐いた

そして聞こえたのは違う人物の声

「そこまでだ」

「今度は誰？」

背後に見える雪

そしてさっきの女の子の前に刀を向ける男の影

私はとっさに

「何してるんだ

その刀をしまえ！1」

ドサッ

彼女は気絶し倒れた

カチャン

「安心しろ最初から斬るつもりはねぇ」

「「「！！！！？？」」」

私は急に眠気が来て

倒れた

～沖田ＳＩＤＥ～

僕は彼女を見たとき息をのんだ

髪色などが『羅刹』に似ていたから

でも彼女のことをきれいだと思った

「誰？」

突然聞こえた声に僕は我に返った

土方さんが

「安心しろ最初から斬るつもりはねぇ」

といった瞬間

僕の方に倒れてきた

柔らかい肌

綺麗だと又思った

この時から僕は『恋』に落ちたのかもしれない

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～ＳＩＤＥ　斉藤～

綺麗だ

そう思った

刀を振るう姿がまるで

蝶（てふ）のような

そして髪色も何もかも

『羅刹』と同じなのにきれいだと

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～ＳＩＤＥ　千鶴～

助けてくれた女の人は

とてもきれいな女の人でした

１つ１つの動きが華麗な動き

そして凛としている声

月明かりを浴びている髪色が銀に光り

綺麗だと思った

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～ＳＩＤＥ　土方～

最初は可哀想だと思った

だが次の瞬間

綺麗な女

と思った

俺が

「安心しろ最初から斬るつもりはねぇ」

といった瞬間倒れたのにはびっくりした

が

沖田が支えたので安心した

が

この気持ちはなんだ？

SIDE OUT

第1夜～出会い～（後書き）

いちおー

終わり

第2夜～自己紹介～

『・・・ッ・・・・・ぅん・・・此処は？』

私が目を覚ますと手は縛られ足も縛られている私と女の子

昨日の出来事を思い出し

私は目の前で寝ている女の子を起こそうと思い声をかけた

『ねぇ起きなさい』

すると数秒後

「っ・・・・・・ぅう」

という声をあげて起きた

私は名前を聞こうと声をかけようとしたとき

スゥゥ

という襖の開く音が聞こえた

次の瞬間声をかけられた

「目が覚めたかい??」

と聞かれた

私は警戒しながら

『アンタ誰?』

と聞いた

「私かい?私の名前は井上源三郎だよ
此処は新選組の屯所だよ」

此処が新選組の屯所

そうかだったら私は
トリップしてしまったんだ

『そう』

と私は言った

そして

井上という男は

「ちょっと来てくれるかい？」

と聞いてきた

『まぁ・・・・・ハイ』

と答えた

「君は如何かい？」

と女の子に聞いた

「えっ・・・・はい」

と彼女も答えた

そして私たちは廊下を出た
床を歩く
井上さんが幹部の名前を出す
彼女は納得いかないようだしなにしろ恐怖で怯えていた

部屋の前についた

「近藤さんつれてきたよ」

といった

「失礼します」

『失礼』

私はあんまり声を出さなかった

すると昨日の男が

「おはよう昨日はよく眠れた？」

「あなたは…」

「・・・・・みたいだね　畳の跡がついてるよ」

見かねた私は助け舟を出した

『こいつは来てない来てたら気配でわかる』

と言ってやった

「そうだコイツは一回も行ってなどいない」

と言った

別にどうでもよかった

だがさも気にしなさそうに

「あっバレちゃった」

などと

むかつくやつだなぁ

ていうか早くしてほしい

と願った

「で、そいつらが目撃者？ちっちゃいし細っこいなぁ…まだガキじゃん」

とチビが言った

『テメェに言われたくねぇよバカっぽい顔してる奴に』

「言われたもんだな平助」

「でもよそっちのねぇちゃんは気が強いな」

などと・・・・・

チビと露出男・バンダナヤローが口論してると

「よさんか3人とも！！」

と怒られていた

私はどうでもいいから

な思っていると

「俺は新選組局長の近藤勇だ」

私はやっぱしと思った

「こちらの山南君が総長でその隣にいるトシ…いや、土方君が副長を務めて…」

「…近藤さん何でいろいろ教えてやってんだよ」

「そうか…」

漫才ですか？

どうでもいいけど

「口さがない者ばかりですみませんねぇ」

『テメェが一番やべぇ雰囲気してんのにそんな事言うんだ』

「おやおや初対面なのに失礼な方だ」

『別に私は素直な意見を言ったまで』

「もういいだろ斉藤昨日のこと聞かせてもえらおうか」

と土方という男が聞いた

第2夜～自己紹介～（後書き）

う～ん終わり？

第3夜～千鶴のお話～

「昨夜、京市中を巡回中に隊士たちが不定浪士らと遭遇。斬りあいになった後、浪士らを斬り伏せましたが、その折「失敗」した様子を目撃されています」

別にどうでもいい

私が死のうが悲しむ人はこの世界にはイナイ

「私たちはなんも見てません！！」

『ハア　別に私はどうでもいいですけど』

「でもよぉお前が『アレ』斬ったんだろ？」

と私を見て言うチビ

『そうだけど』

「なっ私誰にも言いませんだからッ！！」

「でもよぉ」

「私まだ・・・・」

「??何があったんだい?話してみて御覧」

「私の名前は雪村　千鶴といいます。私の父は蘭方医でした蝶に行くことになり文は毎日届いておりました。だけど突然文が来なくなったのですそれで京へきたんです」

ふぅん
だから何？
私は別に関係ないでしょう

「そうだったのか・・・・さしてその人の名は何というのだ？」

近藤っさんて情深い人だなぁ

「雪村　綱道と言います」

「なんだとっ！！お前どこまで知っている？」

フゥン
なんかワケありね

「えっ！？？」

「トシ彼が驚いているだろう！」

えっ
もしかして気づいてない

『ねぇ彼女　千鶴さんは女の子』

・・・・・・・・

えっと

筋肉君とチビと近藤さんが

「ええっ！！！！」

「そんな」

「近藤勇一生の不覚まさか君が女子だったとは・・・・・」

『気づいてなかったんですか』

で

話は進み

千鶴さんは保護決定っと

「さて次はお前だ」

『私も話すの？』

「話せよ」

土方ウザイ

『私の名前は紅月　夜宵』

「それだけか？」

『別に私が言った事を話しても信じるワケないし死んでもいいし』

「むっ
それより
そうか信じるから話を聞こう」

『へぇそれホント？』

「あぁなぁ皆？」

「うん／あぁ」

『そうだったら話すよ私が知ってるすべてを』

そして私は語る

不可思議な語り物を

この世界に私が来たときにはもう

物語の歯車は狂ってしまっているのだから・・・

第3夜～千鶴のお話～（後書き）

えっとセリフが違う所があると思いますが大目に見てくんしゃい

『何故仁王口調？？』

テニプリが好きな夜宵でした

第４夜～嘘？ホント？～

私はため息交じりに言った

『私はここの世界の未来から来た
私には記憶がない
私は普通に学校ここでいう寺子屋から家にかけての帰り道だ
女の人に声をかけられてさっきの刀
『月光華』と言う刀を預けられたいやあの女は私のと言っていたがな
そしたら狂い咲きの桜が目に映って眠くなって倒れて目が覚めたら
ここにいた
それで千鶴さんが悲鳴を上げて駆けつけてあの元人間らしいバケモ
ノを斬ったってワケ』

「嘘つくんじゃねぇよ！！！！！」

土方さんとかいうやつに言われた

私はキレた

『嘘？？っ！！！！！！俺がどんな心境でここにいるのか考えろよ
！！！！記憶がない俺を拾って育ててくれた人がいた！！！！！ま
だその恩も返してないのに目が覚めたら過去にいたたったそれだけ
の事でもな！！！！あの人たちは俺の親捜してくれてたんだ！！』

私は一気に行った

気が収まらない
イライラしてくる

「土方さんやめろ！！！俺はそのことを信じる」

「何言ってんだよ左ノ！！」

「そうだ！！」

『？？』

私は分からなくなった

何故この人が私の肩を持つのかが

「コイツが言ってることはまちがってないとおもうぜ？
本人も気が付いてないけどよ
寂しそうな切なそうな顔してたんだよ
目もそうだった
おれはそう思うぜ」

そうだったのか

気が付かなかった

この人は人の事をよく見てくれてる
なんだか嬉しい

「僕もそう思うな♪だってこの子切なそうな雰囲気出してるもん♪」

この人も・・・

「私もですよ。初対面なのにあの物言いは驚きましたが紅月さんは
嘘を付いてるようにも見えませんでした」

山南さんまで・・・・

「私も信じよう」

近藤さんまでか

『ありがとう（微笑）そしてさっきキレてごめんなさい』

私は笑みを浮かべていた

そこで製麺してる彼らにも気が付かずに・・・・・

第４夜～嘘？ホント？～（後書き）

うん

終わった～

なんかめんどいなぁ～～

学校が・・・・

第5夜　～千鶴の腕試し～

何週間か経った頃・・・・・
私は何が起こったのかさっぱりです

突然千鶴が
「いつになったら父様を探せるのだろう?」
と言って庭に行こうと言い出し
庭に行き

そして千鶴と一が剣を振るうことになっているんです!!

まぁ黙って見守りますけど
そしてすぐ
勝ったのは一

『残念だったね千鶴』

「ハイ」

千鶴が落ち込んでいると

「師を誇れ。おまえの剣には曇りが無い。」

「えっ・・・・・？」

彼女は疑う

「太刀筋には心が現れる。おまえは、師に恵まれたのだろう。」

そういい一は刀を首から離す。

「やっぱり驚いたかな。斉藤君の居合いは達人級だからね」

総司が刺さってた小太刀を千鶴に渡すがしびれていて落としそうになった

「あの、居合いって・・・？」

千鶴は聞く

「帯刀状態から、抜き打ちの一撃を放つ技だ。」

「居合いは片手で抜き打つことが多いから、結果的に威力が下がって実用性は低いなんて

言われることもあるんだけどね」

『けれどさ一の場合一撃必殺だと思うよ。一は新選組の幹部だから強いし
何より千鶴が敵だったら追撃されて首切られてたと思うよ』
私は説明する
「これが、居合い・・・」
手合わせをしたことで、これが、幹部たちの実力だと思うと背筋が凍る。
「・・・・落ち込むことはないと思うが、おまえは外を連れ歩くに不便を感じない腕だ」
「え?」
「斉藤君のお墨付きかあ。これって、かなりすごいことだよ?」
『よかったんじゃない?土方さんが帰って来るのを待とう』
私はそういって千鶴と部屋に戻ろうとした
けれど・・・・・
「どこ行くのかな??夜宵ちゃん♪僕と殺ろうよ」

と言うわけで

私の実力を測ることに・・・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0474z/

薄桜鬼　～鬼姫と呼ばれる鬼～

2011年12月24日10時45分発行